

『学校日誌』を読む

—— 学校文化の社会史研究に向けて ——

仲 嶺 政 光

(富山大学地域連携推進機構生涯学習部門准教授)

筆者は先に、小学校祝日大祭日儀式規程（1891年：文部省）の学校現場への具体的な影響がどのようなものだったのかについて考察した¹⁾。その際主な素材としたのが兵庫県豊岡小学校に残されている『学校日誌』である。本稿は、その『学校日誌』を読み進める作業の中で考えたことを振り返りつつ、若干の考察を加えたものである²⁾。

『学校日誌』や『学校沿革誌』などの諸学校文書は、一つの学校的日常の系統的变化、すなわち学校文化の社会史過程を記述する上できわめて魅力的な史料である。『学校日誌』は実に様々な情報を今日の読み手に与えてくれる。それは、一方では『学校日誌』に何が書かれているのか、という論理的観点からその執筆時点での教育的諸事実を把握できるのはもちろんのこと、他方ではその『学校日誌』がどのように書かれているのか、という執筆行為論的な観点から「書く」という実践的営みそのものを把握する道も開けてくる。前者も重要なことは当然であるが、今回は主に後者の観点から『学校日誌』の解説を試みたい。



豊岡小『学校日誌』は、戦前においては同校の校長に次ぐ筆頭格の教員が、戦後は教頭が執筆を担当したとされる、やや管理職の立場からの日々の記録である。各時期それぞれにとっての主な出来事や関心事が記された文書であり、後で見つかった誤記は赤字による修正と押印、または小さな紙片が貼り付けられるなどして訂正されたこともあった。また、付記・参考事項が該当箇所に別紙として綴じ込まれたり、記入用紙を二つ折りにして製本された時期には、希に袋とじの形で資料が挟み込まれることもあった。細やかな執筆作業ののちには要点が整理・清書されて『学校沿革誌』巻一～十二にまとめられている。

豊岡小『学校日誌』と同『学校沿革誌』の解説は一橋大学の共同研究グループによって進められた。その作業は、「学校」「教員」「児童」「父母地域」「社会情勢」の5つのジャンルに記事を分類し拾い上げることからはじまった。この最初の作業の成果として、1890年度から1960年度まで10年刻みで各情報を拾い集め、要約して一覧表を作成することができた³⁾。その後、豊岡小所蔵諸史料についてのリストアップもおこなわれた⁴⁾。かなりの時間を必要としたものの、この共同作業を経ることで、膨大な文書の中から重点的なテーマを絞り込むことが可能となった。

学校の日常を記し、歴史を紡ぐ

いつからこの『学校日誌』が編まれるようになったのかはわからない。しかし現存するものについてはすべて豊岡小学校所定の場所に特産だった柳行李やなぎこうりに入れて保管されている。今なお執筆が続

本日正午ヨリ暴風雨城崎川溢流都
田田寺町間堤防破壊為明治
十九年中増築の間口八間奥行
九九間及旧増築間校模堂六米皆
流失且破壊部分中事務司書
籍畧械室等書籍畧械帳

竹簿類悉此皆流失
セリ

このような事情から現存する『学校日誌』は災害復興の記述からはじまることになる。『学校沿革誌』によれば、「古老の言」にあたるなどして流失してしまった時期の情報を集める補完作業も試みられている。学校の歩みを細かに記録しておくことが重視されたのはこの豊岡小に限らないものだろうが、製本された『学校日誌』表紙に刻まれた「第一種永久保存」

いつの日か本格的な豊岡小の歴史を編纂すべし、『学校沿革誌』巻一に記されたその願いは戦後豊岡小教師らにまで着実に受け継がれ、『豊小八十八年史』（1962年）に結実している。なぜ九〇や百でなく「八十八」なのか——学校の「米寿」を祝うという表向きの理由だけでなく、多大な功労者であった当時の校長退職に間に合わせたい、そのような思いを込めて生み出されたのが同書である。そのことを反映してか、学校文書以外のさまざまな歴史資料を用いて作成された年表は長大・詳細であり、豊岡小学校史上の画期を思わせる重要な出来事は多くがこの『豊小八十八年史』の中で抽出されている。『学校日誌』の分析を進める上で同書から受けた示唆は大きかった。

– 38 –

空襲警報などのものものしい記事であふれかえるようになる。当初、一つに製本された1945年度『学校日誌』4月分の欠落は、そうした戦時下の混乱により執筆が不可能だったのだろうと思われた。ところが、豊岡小所蔵文献を手分けして逐一点検しリストを作成していく作業の過程で、この間の欠落部分がすべて発見された⁶⁾。その未製本分の記事を見ると、入学式の翌日早くも「午前九・〇〇 警戒警報発令 午前九・二〇 空襲警報発令」(1945年4月7日)に見舞われ、年度始期の華やかさが奪われた当時の様子がわかる。「天長節拝賀式挙行」直後も容赦なく警報は鳴り響く。「警戒警報の発令 十時三分 全解除 十時四十一分 全発令 十二時五十四分 全解除 全発令 十三時四十五分 全解除十四時〇分」(1945年4月29日)。命脅かす戦時まっただ中におかれても、豊岡小教師が一日も余すところなく『学校日誌』に向かい記し続けた事実が明らかになったとき、われわれ共同研究グループの間に嘆声とともに感慨深い空気が流れた光景が思い出される。

記入用紙の変化

『学校日誌』をどのように記述するか、それは時期によって多様さがあり、ときに試行錯誤もみられた。「本日より少し日誌の記入方を改む」(1888年9月27日：簡易科)。用いられた記入用紙、筆記用具、文字の大きさ丁寧さ、句読点や改行・改ページの用い方、それらを通じての主観や感情のこもり方など、各時期にみられる書記文化史的多様さや変化をここで詳細に分析する余裕はない。そこで、以下では『学校日誌』の記入用紙の変化ということを軸に特徴的な点を述べていきたい。

最も古い時期にあたる1885年7月から1906年、その後一時を除きほぼ大正期に相当する二つの時期は、記入用紙に縦書きの罫紙が用いられた。このころは、日付・曜日・天候のみの記述にとどまる日、あるいは「無事」「無異事」とのみ記された日(1887年9月10日他)から長大な量に及ぶ日までさまざまである。日々の出来事を臨機応変に記録する必要性に対し、罫紙はこの上なく適的な記入用紙であった。罫線で区切られた一行に日付を記すだけでそれが一日の見出しとなって他との区別がつき、文字の大きさと縦の並びにも秩序を与える。それだけでなく、記録に残したい別紙を多く挟んで綴じするような製本方法にも適する。特に年間を通じての諸慣行が定まっていなかったと思われる古い時期はどうしても日々の執筆量に幅がでてくるのも無理はない。罫紙は、何も書くべきことがない日、数枚に及んで書かねばならない日にそれぞれ対応できる記入用紙であった。

これに対し、1907～1911年度、1927年度以後は印刷版のフォーマット(1日ごとに記入欄が区切られ、さらにそれぞれの日にちごとにいくつかの見出し・細目を冠するセルの組み合わせで構成された『学校日誌』専用の記入用紙)が導入された。各時期の記入用紙の変遷は表1に示した通りである。書類・物品のやりとりと尋常科生徒の出席率算出に関心が高かったことによるものか、最初のフォーマット導入時にはそれらの詳細な記入欄が設けられた。しかし集約と集計の煩雑さからだろうかあまり記述されず、この欄は二年間で消滅し、記事・職員・生徒という大ざっぱな分類方法に改められた。その後1912年度に一度罫紙に戻るが、1927年度から再びフォーマットが採用され、いくつかの変化を経て現在に至る。

表1 『学校日誌』記入用紙の変遷

年度	形式	押印欄	主要な記入欄の見出し	職員・生徒欄	その他
～1906	罫紙				
1907～08	活字印刷 見開き2日	—	記事	職員、生徒（在籍者数・出席者数・出席率） ^{*1}	文書（番号・事件之要旨・差出人・宛名・調理・完了）、物品（受入先・品目・数・価格）
1909～11 ^{*2}	活字印刷 見開き2日	—	記事	職員、生徒	—
1912～26	罫紙				
1927～28	手書き印刷 見開き2日	—	教育の実際	職員勤務	来校者、其他事項
1929	活字印刷 見開き2日	—	教育の実際（教授・訓育・事務）	職員勤務	行事との関係、来校者、其他事項
1930	活字印刷 見開き2日	—	教育の実際	職員勤務	行事との関係、来校者、其他事項
1932～37	活字印刷 見開き2日	—	教育の実際	職員勤務	来校者、其他事項
1938～39	活字印刷 見開き2日	なし （39年度のみ印あり）	教育の実際（朝会・向上会） ^{*3}	職員勤務	来校者、校舎貸与（主催者・目的・時間・貸与場所）2件、其他事項
1940・41 ^{*4}	活字印刷 用紙1枚2日	—	教育の実際（朝会・向上会）	職員勤務	来校者、校舎貸与（主催者・目的・時間・貸与場所）2件、其他事項
1942～44	活字印刷 見開き2日	なし （印あり）	教育の実際（朝会・教育の実践）	職員勤務	来校者、校舎貸与（主催者・目的・時間・貸与場所）2件、其他事項
1945	手書き印刷 見開き2日	あり	教育の実際（朝会・教育の実践）	職員勤務	来校者、校舎貸与（主催者・目的・時間・貸与場所）2件、其他事項
1945～48	活字印刷 見開き4日	記入者 検印	学校行事	出張教員、欠勤教員	社会行事、其他
1949～50	活字印刷 見開き2日	検印	教育実践（朝会・行事）	職員勤務（出張・欠勤）	来校者、貸与関係（主催者・使用目的・時間・場所）2件、其他事項
1951	活字印刷 見開き4日	校長	重要事項〔12行〕	—	来校者
1952	活字印刷 見開き4日	校長	学校行事〔10行〕	出張〔2行〕、欠勤〔2行〕	渉外会合〔3行〕、来校者〔3行〕
1953～60	活字印刷 見開き7日 ^{*5}	校長	学校行事（分団行事）	出張、欠勤	渉外会合、来校者 ^{*5}
1970～	活字印刷 見開き7日	校長 教頭 記入者	行事	欠勤休暇	来校者、備考 ^{*6}

*1 高等科の場合は生徒在籍・出席のデータ記入欄がなかった。次年度以後は尋常科も同欄がなくなる。

*2 前年度のフォーマットが用いられており、「明治四十三年」という活字が印刷されている。

*3 「朝会」「向上会」という見出しは、1930年ごろから手書きで書かれることも多かった。

*4 二年度分を大型用紙に記載するもので、上段が1940年度、下段が1941年度に分かれる。

*5 見開き2ページ分が8等分され一週間分の記載がある。8番目の欄には育友会行事、児童特記事項、備考欄の細目がある。

*6 いつからこの形式に変化したかわからない。また、8番目の欄は一つの大きな備考欄に変化した。

罫紙からフォーマットへ

『学校日誌』を通観してみても最初目につくのが1907年度からの記入用紙の変更、すなわち罫紙にかえてフォーマットが導入され、ある種の「規格化」⁷⁾が進んだ点である。記入用紙の変更は一見したところ単なる事務的な都合のようにもみえるかも知れないが、これは学校文化とその記述様式のありようと固く連動した変化の局面と考えるべきである。すなわちフォーマットの導入とは、なにより執筆空間を特定事項に分類し記述量を限界づけることを意味しており、その範囲内で学校の日常を記述してかまわない、記述できる、ということの宣言が暗になされたことに他ならない。つまりフォーマットは、その学校が、セルによって分割された諸項目に限定し焦点を定めて現実を記述しうる日常的秩序維持のちからを獲得するに至った学校文化の社会史的段階においてこそ存在しうるものではないだろうか——ただし、これは他の学校の事例研究を積み重ねることによって明らかになる事柄であるが。その段階では、就学率や通学率、卒業率の上昇とその高水準の維持、そして教育実践の基礎的な秩序が確立していることを背景に、学校生活の過程で思いがけない出来事（「本日は明十五日当地氏神祭の夕祭にて生徒の出席するもの四分の一に下る」など：1887年10月14日）が少なくなったという判断のもと、『学校日誌』を記述するという行為が特定の焦点からそれたあらゆる雑多な情報を収集し記録・保存することと決別したことを意味している。実際、フォーマットの導入までに『学校日誌』に記された文字の量は変化しつつあった。1885～1910年度（5年刻み）の、一年間365日を分母として一日あたりの平均文字数および標準偏差と変動係数（標準偏差÷平均）をみたのが表2である。

表2 平均文字数と標準偏差と変動係数（1885～1910年度）

	1885 ^{*1}	1890	1895	1900	1905 ^{*2}	1910
平均	50.2	44.4	42.7	32.8	54.4	27.4
標準偏差	55.637	95.705	53.299	55.432	117.310	37.969
変動係数	1.108	2.155	1.248	1.692	2.158	1.386

*1 ただし、最も古い記録は1885年7月から記述がはじまっており、やむを得ず1885年7月～1886年6月を「1885年度」として扱った（以下同）。

*2 この年度はちょうど日露戦争終結にあたり、その関連の記事が多く例外的に大きな数値を示している。

この6年度分の数値をみると、一日あたりの平均執筆量は経年的に減少しているようにみえるし⁸⁾、また経年的規則性があるとまではいえないが、年間を通じての執筆量のばらつきはフォーマットが採用された1910年度でやや低い値を示している。

ただし、新しい記入用紙への変更にあたりまだ試行錯誤的な様相があったこともかいま見ることができる。記入用紙がちょうど大正に改元する年に一時的に罫紙に戻っているのは、それまでのフォーマットに「明治四十三年」が印刷されていて使用できなくなっただけでなく、この段階ではフォーマットそのものの使いづらさから新調を控えたことが推測される。フォーマットは、毎日何かを記述すること、しかしあまり多くは記述しないことを前提とする。ところが初期のフォーマットは1日に1ページを割り振ったために罫紙を用いていた頃と比べ1年度の分厚さを増し、全体に空白がかなり目立つ。図示した1907年9月13日金曜日は晴天であったこと以外は何も記されておらず、有用なフォーマットとして機能していない例である。罫紙を用いた場合はこのようなむなしい空白はありえない。逆に、生徒の成績一覧集計と「某校長誨告の要旨」が別紙として綴じられた

り（1907年3月26日高等科卒業式記述の後）、1909年12月16日「改築落成式」記事の1日1ページの原則を破る長大さはフォーマットでは対応できなかった例であり、この時期はなお記録にとどめるべきとされた情報量の幅が大きかったようである。



分離された記述様式へ

『学校日誌』の記述方法、ここではとくに記事の分類方法という側面に着目して変化を追ってみたい。フォーマットが固定された見出しをもつことに対し、罫紙はアクセントのつけ方が自由である。最も古い時期の『学校日誌』には見出しにあたるものが全くなく、そこに何が書いてあるかは最後まで読まないと理解できない形であった。しかしほどなくそこに何が記述されているかが条項的に整理された〈見出し+空白+記事内容〉という記述様式がみられるようになる（図示は1888年5月1日の例）。出勤状況の記述を例にみてみよう。

〈見出しなし〉

△某病氣傭補助員某実母篤疾補助員某亡親正当の祭日につき并に欠席（1885年8月1日）

〈見出しあり〉

- ▲ 病氣欠席者 訓導某、某、補助員某某なり（1886年8月24日）
- ▲ ○員遅刻 本校受業生某腹痛にて一時間出勤を遅刻す（1887年4月18日）
- ▲ ○職員欠勤 某病氣に付欠勤（1887年9月5日）

『学校日誌』における見出しの挿入は、ちょうど1887年の民間国語教科書の中に「書き出し、改行後に一字下げる表記法のものが登場した」と指摘されている点と時期が重なっており⁹⁾、同時期における書記文化史上の変化として関連性があることなのかも知れない。

続いて最初のフォーマットが導入される以前、つまり罫紙使用時代にあたる、1890～1905年度の『学校日誌』に打た



れた各見出しについての変化を見てみよう。まず、見出しを①行事：学校で催される各種行事、②各種校務：人事、出張、施設設備など校務全般にわたるもの、③渉外：校外からの来校・参観、寄贈など、④欠勤遅刻早退：教師の欠勤・遅刻・早退の記録、⑤公文書：文書の発送・回覧など、⑥その他・不明、にそれぞれ分類し5年刻みに増減をみたのが表3である。

表3 『学校日誌』に記述された見出しの変化（1890～1905年度）

	1890	1895	1900	1905
①行事	62 (14.2%)	42 (8.8%)	70 (18.1%)	104 (28.3%)
②各種校務	141 (32.2%)	93 (19.4%)	134 (34.6%)	114 (31.1%)
③渉外	17 (3.9%)	48 (10.0%)	43 (11.1%)	98 (26.7%)
④欠勤遅刻早退	144 (32.9%)	120 (25.0%)	112 (28.9%)	35 (9.5%)
⑤公文書	64 (14.6%)	173 (36.0%)	25 (6.5%)	6 (1.6%)
⑥その他・不明	10 (2.3%)	4 (0.8%)	3 (0.8%)	10 (2.7%)
合 計	438 (100.0%)	480 (100.0%)	387 (100.0%)	367 (100.0%)

これをみると、②各種校務など一貫して多いものもあるが、①学校行事や③渉外など、学校の非ルーティン的な部門に属する出来事の見出しが増加し、④教師の欠勤遅刻早退や⑤公文書のやりとりなど個別事項や事務的な事項は相対的に減少していることがわかる。すなわち、これらはすべて記入用紙に罫紙が用いられた時期のことなのだが、教育の活動本体が主要な位置に押し上げられ、他の事項と分けて記述するフォーマットの形式に接近していることが読み取れるのである。フォーマットの導入は、誰かの突然の発案によるものというより、学校的日常の記述様式の経年的変化に対応した必然であったことを感じさせる。

こうして『学校日誌』は教育実践を記述する文書としての性格を明確にしていく。フォーマットの主要記事欄は最初に「記事」という抽象的な見出しがつけられたが、以後教育の営みを記述する専用の欄となり、その他との区別が明白になっていく。1927年度には、これが「教育の実際」という名称に変更され記述内容が教育実践に限定され、さらに1929年度はここに「教授」と「訓育」という教育実践の両軸的な類型に踏み込んだ細目もみられるようになった（そして最終的には「学校行事」という見出しに落ち着くことになる）。

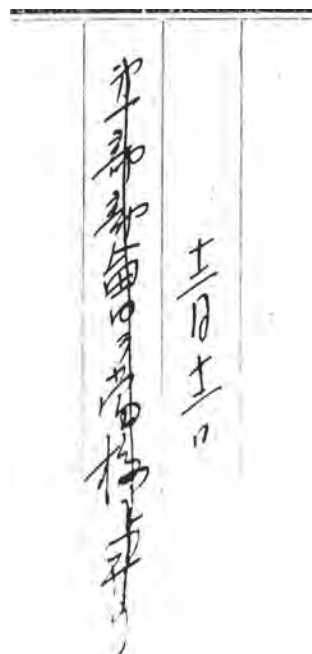
この間、一人の教員が受け持つ児童数は増加を続け、1915年にはピークを迎えていた¹⁰⁾。また、豊岡小では全国平均を上回るペースで就学率・出席率もともに高まっていた¹¹⁾。加えて1900年9月には『学校沿革誌』が学校の正史として編纂されるようになったことから、これ以後その基礎データとなる過去の『学校日誌』への参照を効率よくおこなうことも求められるようになっていた。

再び、フォーマットの導入へ

さかのぼってみると、最初のフォーマット導入以前の罫紙には、月末や年末年始、年度末などの暦上の大きな節目を除き、一行に文字を全く記さない空白行がほとんど存在しなかった。すなわち、文脈の異なる記事や日付が距離を置かず緊密に記され、それぞれを区別する目的による空白行が意図的に避けられていた。この意味では日々の区切りは弱く、いつ何をおこなったかを振り返るための工夫は相対的に少なかったといえる。これに対し、最初のフォーマット導入から一時的に罫紙に戻った1912年度からの『学校日誌』は日付間・記事間に空白行が入るようになる。それは一行の

場合もあれば複数行の場合もあり、反対にしばしば空白行がない場合もあって記述法の一貫性に弱まりもある。また、冒頭に図示した災害復興記事にみられるような楷書風の文字間が分離された記述法がとられなくなり、ときに走り書きないし続け字によるために難読文字が多い時期が訪れる。1912年からは毛筆ではなくペンを用いて記述されるようになる（一時的に毛筆に戻った時期もあるが）。このことで小さなスペースに迅速に文字をおさめることが容易になったということもあった。

1927年、再びフォーマットが導入されるまでの間にかなり執筆時間が短縮されているように見える。例えば誤記訂正は紙片を貼り付ける清書さながらのやり方よりも簡便になされるようになる。図示した1914年12月13日開催の「第一部会」が12日の欄に誤記されたことに対する抹消線、あるいは同年度初めの学級編成表中の受け持ち児童数の微調整・誤記訂正の方法は、この文書が最終的な完成文書（ex.『学校沿革誌』各巻）作成の準備段階に置かれるようになったことを思わせる。細かく丁寧に記すことに手間を感じるが、それでも記録に残すべき情報量は事項によっては依然多くある、この点で最初のフォーマット導入から大正期の罫紙が用いられた時期は——用いられた記入用紙は異なるものの——記述方法の試行錯誤という点で一連の過渡期だったといえよう。



これに続いて再び導入されたフォーマットは、表1にみるようにセルの見出しに変化はあるが、以後『学校日誌』の記入用紙として定着し、独立した公文書の性格を備えるようになっていく。例えば『寄宿舎日誌』（1891年～）、『当直日誌』（1912年～）には、管理状況と文責を明確にする必要から

記名・押印をなす慣行がみられるが、『学校日誌』には長くそれがなかった。『学校日誌』フォーマットの欄外に検印がなされるようになったのは1939年度からであり、また



記入者・検印者の押印欄がフォーマットに正式なセルとして採用されたのは1945年5月からである。このように複数のスタッフが記載事項の確認に関与するようになったことは、他者への回覧を前提に、記述内容が短時間で了解できる形をとるようになったことを意味している。

フォーマットが再導入され定着をみた1927年度以後、「その他」欄が設けられたことはもう一つの画期だった。これは一部の例外をのぞき特定の事項以外を記さない原則がおおむね成立したとみなすことができよう。その背景には、1930年代における学校の「当たり前」事項の確立¹²⁾とその無意識化¹³⁾が進行し、また各種校務分掌などの組織的多様化・複雑化から、一人の執筆者が一つの文書に学校の営みの詳細を集中的に記録・保存することが心理的にも物理的にも難しくなっていく過程がある。学校の多様な活動・出来事の内容そのものよりも、大まかに取捨選択されたそれらの滞りなき遂行事実を記すことが重視されるようになった、と言い換えることもできよう。

ここに至り、『学校日誌』は歴史編纂の目的とは異なる実用的性格を強めるようになってくる。

『学校日誌』の記述者およびその主要な閲覧者として想定されたのは管理職など一部の内部関係者であったことは想像に難くない。かれらは以前よりも学校人員の規模が拡大し安定した学校的日常が確立してくる中で、いつごろどんな活動をなすべきなのかを事前に把握し周囲に適確な指示を与えなくてはならない役目を負うものであった。フォーマットは日付の進度が等間隔であるため、過去の活動例を振り返ることが罫紙の場合に比べて格段に容易である。さらに複数年度を「合本」する慣行（各年度表紙に赤い付箋紙が貼り付けられて区別された）は昭和に改元する年から改められ、各年度単独で製本されるようになるなど、フォーマットのセルによる分割も含めて、この時期までに強く分離され参照が容易な形の執筆構造が確立している様子が読み取れる。その点では1940・41年度『学校日誌』は二つの年度が上下二段にならべられた二年度合本型の変わり種フォーマットだが、前年度の同じ月日を参照することの便宜に特化した象徴的な工夫の試みだったといえる。

戦後における記述内容の縮小

さらに、戦後『学校日誌』の記述内容が以前よりも抽象的な色彩を帯びていったことも特徴的である。フォーマットは大きく①主要事項の記入欄とともに、②職員・生徒の事項、③それ以外の渉外や物品などの事項に分かれる。これらは一部例外を除いて一貫してフォーマットに存在している事項である。個々の生徒についてはフォーマット導入当初と1953～60年度の「児童特記事項」欄（ただし一週間に一つだけ）の例外を除き特別な欄がみられない。時代が下るにつれ個別生徒に関する出来事への言及は少なくなっていくが、この点は中途入退学や賞罰に関することで個々の生徒がしばしば実名で登場する古い罫紙時代『学校日誌』の具体的描写とは対照的である。

このことは、戦後を通じて一日あたりの記入欄のサイズが著しく縮小していったことと連動している。フォーマット導入以後の記述はおしなべて箇条書きか短文で済ませることが多く、別紙挿入の例も少ない。「ちょつと思ふがままにここに書きつゝ」（1905年10月22日：秋季運動会の日）のようなおおらかな日記風の叙述はもう見られない。フォーマット自体1日分のスペースが限られているということもあるが、それだけでなく、見開き2日（1907年）→4日（1945年）→7日（1953年）と省スペース化¹⁴⁾が進むため、そのような長い叙述が入る余地はますますなくなっていったのである。教育の活動が歴史的に積み重ねられることで一定のリズムが定着し、活動の細かい段取りや講評まで記す必要が感じられなくなってきたのだろう。あるいは具体的な記述や記録が必要とされた情報は製本版『学校日誌』から離れて別紙扱いか学年・学級・個人単位に分散していった様子がうかがえる。

このため、『学校日誌』だけで教育実践の具体像を明確に再現し分析することは特に戦後においては難しくなる¹⁵⁾。従って学校文化の戦後社会史は個々の教師や子どもたちによって生み出された内外の記録が比重として大きな意味を持つようになってくるのである。

注

- 1) 拙稿「学校儀式の「通観」的分析——豊岡小『学校日誌』を素材として」『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報』13巻、2011年所収。これの初出は拙稿「2章1節 儀式と学校秩序：試行錯誤から範型成立までの記述」『学校文化の形成・展開と地域社会——豊岡小学校100余年と但馬地域教育実践活動の社会史的・文化論的・社会学的解明』2006-2008年度科研費報告書（研究代表・久富善之）2009年3月である。拙稿（2011）は以下のサイトにて、PDFファイルで公開されているので参照されたい。

<http://doi.org/10.15099/00007094>

- 2) 本稿は拙稿「『学校日誌』解題」『学校文化の形成・展開と地域社会』前掲所収に加筆修正を加えたものである。その際、まだ理解不十分ながらB. パーンステインの「分類」という概念を参考にした。パーンステイン〔久富善之・長谷川裕・山崎鎮親・小玉重夫・小澤浩明訳〕『〈教育〉の社会学理論——象徴統制、^{ペダゴジー}教育の言説、アイデンティティ』法政大学出版会（新装版）、2011年。
- 3) 『日本の学校慣行・行事・儀礼の社会史的・文化論的研究——「学校日誌」・指導記録・地域資料の100年から、現代学校改革へ』2002-2004年度科研費報告書（研究代表・高津勝）、2006年3月。
- 4) 大西公恵「豊岡小学校所蔵の諸史料と保管状況」『学校文化の形成・展開と地域社会』前掲、pp.176-183。
- 5) 久富善之「1章1節 豊岡小学校の制度・学校時空間の構成と変化：小学校としての制度変化、校地・校舎、学年・学級制の確立」『学校文化の形成・展開と地域社会』前掲、pp.39-41。
- 6) 大西公恵「豊岡小学校所蔵の諸史料と保管状況」前掲、p.178の史料リストNo.84の備考欄を参照。
- 7) 木村元「序-3 本研究で明らかにしようとする史資料」『学校文化の形成・展開と地域社会』前掲、p.26。
- 8) 1910年度と他の年度の一日あたりの平均文字数に有意な差があるかどうかを確かめるために一元配置分散分析を実施した。その結果、Leveneによる等分散性の検定において $p < 0.05$ であったためGames-Howellによる多重比較をおこなったところ、1900年度を除きすべてにおいて有意な差があることを確認した。
- 9) 野澤卓式「小学校国語教科書・表記の変遷」『九州女子大学紀要』第41巻1号、2004年。
- 10) 福島裕敏「3章1節 学校職場の教員人事構成の変化に注目して」『学校文化の形成・展開と地域社会』前掲、p.144。
- 11) 泊史「1章2節 入学・通学・卒業という行動様式の慣行化・普遍化過程」『学校文化の形成・展開と地域社会』前掲、p.53、60。
- 12) 1930年代に教育史的画期を見出した研究として土方苑子『近代日本の学校と地域社会——村の子どもはどう生きたか』東京大学出版会、1994年、木村元編『人口と教育の動態史——1930年代の教育と社会』多賀出版、2005年がある。
- 13) 『学校日誌』に書かれたこと・書かれなかったことはそれ自体が同時代学校文化のあり方を何らかの形で表現しているものである。久富善之「(I部導入)一つの学校でつかむ「日本の学校文化」の社会史的具体相」『学校文化の形成・展開と地域社会』前掲、p.34を参照。
- 14) ただし1949～50年度は例外的に見開き2日分のスペースがあてられている。
- 15) 例えば筆者はある小学校の戦後『学校日誌』の解説を5年きざみで試みてみたが、その記述内容は高度にルーティン的で、管見では学校文化の大きな変化の局面を把握することができなかった。ただ、これは戦後『学校日誌』に史料価値が少ないというわけではなく、一見単調な記述の中にも有効な分析観点を設定し変化を追う可能性は大いに残されているだろうし、また過去や未来の記述様式との相違を比較するという研究的展望も考えられる。